

中川 渚

平成 26 年度 文化科学研究科学生派遣事業 研究成果レポート

1. 事業実施の目的：パコパンパ遺跡出土土器の分析
2. 実施場所：ペルー共和国カハマルカ州チョタ郡パコパンパ村
3. 実施期日：平成 27 年 1 月 23 日（金）から 2 月 26 日（木）
4. 成果報告

#### ●事業の概要

アンデス形成期（紀元前 2500 年から紀元前 200 年）は、土器や公共建造物が出現し、遠距離交易が活発化する時期であり、階層化が始まる社会であるとされてきた。この時期の祭祀センターとされるパコパンパ遺跡では、2014 年の発掘調査によって、パティオ内から饗宴によるものと見られる土器集積が検出された。時期の異なる 3 箇所から検出されたこの土器集積からは、計約 800kg もの大量の土器が出土しており、半完形や完形になるものも多く含んでいる。饗宴は、特別な機会に特別な食事や飲み物を分かち合う行為とされ、特に主催者が多くの人に食事や飲み物をふるまう場合、主催者とゲストとの関係が対等ではなくなることから、権力の生成や社会の階層化との関連で論じられることが多い。権力や階層化の出現期と考えられるアンデス形成期では、その発生プロセスを解明する鍵として、重要なテーマのうちの一つに位置づけられている。これまで他のアンデス形成期の遺跡で確認された饗宴の痕跡としては、饗宴で使用したと見られる土器や道具類が、その後別の場所で廃棄され、形成された遺構が挙げられる。しかし、パコパンパ遺跡で検出された土器集積は、別の場所に廃棄されたのではなく、パティオ内で饗宴を行ったそのままの状態に廃棄されたものと考えられ、パコパンパ内での権力の発生プロセスだけでなく、その様相を他地域と比較する上でも貴重なデータとなっている。調査者は今回の調査で、この土器集積から出土した土器を、饗宴によるものと言えるのかどうか、饗宴であるならばどのようなものが使われていたのかという視点から分析した。具体的には、より集中度の高い箇所を抽出し 5298 点、104.5kg 分を、タイプごと／器形ごとにカウントし、タイプ構成と器形構成およびそれらの時期変化について分析した。そしてこれらのデータを、他の出土コンテクストとの違いを明らかにするために、これまでの調査で得ていた、主に構造物を建造した際の埋土から出土した土器のタイプ構成・器形構成のデータと比較した。また、土器集積の土器は基本的に破片状態で出土しているが、接合可能なものが多く、大きさや形状をより正確に復元して想定される用途の具体性を高める目的で、分析と並行してこれらの土器の接合を行った。このほか、今後の研究発表のために写真撮影と実測図を作成し、資料公開の観点から、半完形・完形のものを中心に 3D スキャナーを用いてデジタル化した。

#### ●本事業の実施によって得られた成果

本調査から、土器集積から出土した土器が、埋土とは大きく異なるタイプ構成・器形構

成であることが明らかとなった。これらの構成は先行研究で言及されるものと類似しているため、饗宴によるものである蓋然性が高まった。筆者はこれまで、アンデス形成期のパコパンパ遺跡から出土した土器を、製作・流通の視点から分析してきた。今回のデータによって不足していた消費の視点が補完され、博士論文のテーマである、パコパンパ遺跡における土器のライフヒストリーの全体像が浮かび上がってきた。また、饗宴というアンデス形成期研究において重要視されるテーマが加わったことで、博士論文の中でも議論を一層深められるデータを入手することができた。

本調査による成果は平成 27 年 12 月の古代アメリカ学会で研究発表するほか、同学会の学術誌に論文として投稿する予定である。また、資料公開のためにデジタル化した 3D データは、他の 3D データとあわせてデータベース化し、平成 27 年度中に公開する予定である。3D データベースの作成に関しては、平成 27 年 3 月 29 日、日本情報考古学会で「パコパンパ遺跡出土土器の 3D データベース作成」のタイトルで研究発表した。同学会の学術誌にも論文投稿する予定である。

#### ●本事業について

フィールド調査や遠方での学会参加など、研究を進めるにあたってはお金が必要になることが多く、大学としてそれをバックアップしてもらえるこの事業は、学生にとって非常に助かります。今後も同事業が継続されることを強く望みます。